http://decfamily.p1.bindsite.jp/2013NEW/

We 25R

No.337　14/03/18

翻訳

明日は星陵セミナーである。過去３回参加したことがあるが、なにせ「綺羅星のごとき」先輩方である（←「」の中は読めるだろうね？「キラボシのごとき」であるが、切れ目は「キラ・星のごとき」である）。君たちは何気なく授業を受けるが、その方面のことに詳しい人にとっては、垂涎（←読めるだろうね？）ものの講義ということになる。そんな方々から、２時間も小人数でお話しを伺えるのだから、ぜひこの時間を大切にして、質問したいことがあったらどんどん質問することだ。講演をして、質問が出ないことほどつまらないことはない。そんな思いを先輩方にさせることのないよう、しっかり学び、しっかり考えて、自分の将来に結びつけてほしい。

＊

印象に残っている講義は、（残念ながら今年は参加されていないが）東京大学のアメリカ文学研究者、柴田元幸先生の講義。この方はアメリカ文学研究者としても翻訳家としても有名である。つい先ごろ、村上春樹がサリンジャーの『フラニーとズーイ』の新訳を新潮文庫から出したが、その付録解説を読むと、村上さんは柴田先生と相談しながら訳をつくったことが分かる。村上春樹との共著もあるし、多分、東大駒場の教養学部用英語教科書（書店で買えます）の編集にも携わっていたはずである。

まあ、それくらいの先生であるが、星陵セミナーでは、あるアメリカの小説の一節を使って、実際に翻訳を作るという講義をして下さった。生徒に翻訳を作らせて、それを添削するというやり方で、東大のゼミの雰囲気も感じさせてくれるものであった。私もこっそり翻訳を提出したところ、生徒のものに混ぜてあったため、当然のことながら？「すごくイイ翻訳がありますね～」と褒めてもらった。そりゃそうである。生徒諸君はまじめに翻訳しているが、こちらは年相応の？余裕があるから、それらしい言葉を工夫したり、ちょっとふざけた表現を混ぜてみたりすることができたのである。

２度目の添削からは、さすがに教員であることがバレてしまったので、ほめてもらえなくなったが、なかなか楽しい経験であった。

その時、柴田先生から紹介された本が、レーモン・クノーの『文体練習』（朝日出版社）。一つの文章（内容）を、99通りの言い回しで表現するというもので、元のクノーの本もすごいが、それを日本語に訳してある翻訳もすごいという面白い本である（翻訳者は朝比奈弘治）。ちょっとお高いので、外国語や翻訳に興味のある人は、本屋さんで立ち読みしてみるといいだろう。

＊

授業で古文の現代語訳をする際は、当然、入試向けの訳をつくっている。残念ながらそれは「翻訳」というレベルではない。できれば「翻訳」を目指す授業などもしてみたいと思うが、何がよい翻訳なのかという問題もありなかなか難しい。

英語なども、「訳すことそのものが楽しい」という人がいるに違いない（私は古文を訳すのはかなり楽しい…）。そういう人は翻訳家に向いているのかも知れない。